

は即ち是れ衆生の生・老・病・死常に來りて人に切るなり」と云へり・摩訶止觀(曾本)卷一ノ四にはこの涅槃經の説に依りて「三界は無常なり。一箇偏に苦しむ。四山合し來らば逃避する所なし」とし、輔行に之を釋して山來ると言ふは非喩を以て喩となす。四山は四大なり。四方は生・老・病・死なり」とせり。(中略)増一阿含經卷十八には同じく波斯匿王に對する説法として四大恐怖襲ひ來りて此身を害せんとするに當り之を避くる由なきことを明せり。即ち一に老壞、少壯を敗して顔色なからしめ、二に病盡、無病を壞敗し、三に死盡、命根を壞敗し、四に有常のものは無情に歸す。此四方は何物も能く障護すべからず、力の能く伏する所に非ず、猶ほ四方に四大山あり四方より來りて衆生を壓するに力の能く却くる所に非ざるが如しとせり。

(『佛教大辭彙』第三卷 二二二〇～二二二頁)(傍線 筆者)

この説明によれば、人として避けることの出来ないものが「生・老・病・死」の四苦である。これを「513偶作」の詩句に充ててみると、一句目の「病は衰老を追いて到る」の句意が、四苦の「老・病」を踏まえていると考えられる。とすれば、三句目の「此の賊 逃るる處なし」の句意には四苦の「死」が踏まえられることが判明する。つまり、この詩の背景には、先の仏教の思想が色濃く反映されていることが明らかにされる。

このことを念頭に置き、「513偶作」を再吟味してみると、筆者が前稿(注二)で論じた以下のような推測が可能になるように思う。

三句目で「此の賊 逃るる處なし」と自分の死期の迫ったことを悟っている道真には、四句目で「觀音念ずる